

ホルスタイン成乳牛および 交雑種肥育牛に実施した 眼球摘出術

(株)益田大動物診療所

山本哲也、加藤圭介、原知也、嶋田浩紀

足立全、岸本昌也、加藤大介



症例①

- ホルスタイン種 成乳牛 87ヵ月齢 5産目

- 臨床所見

後頭部化膿巣から血行性に細菌感染し
右眼球突出及び壊死を認めた

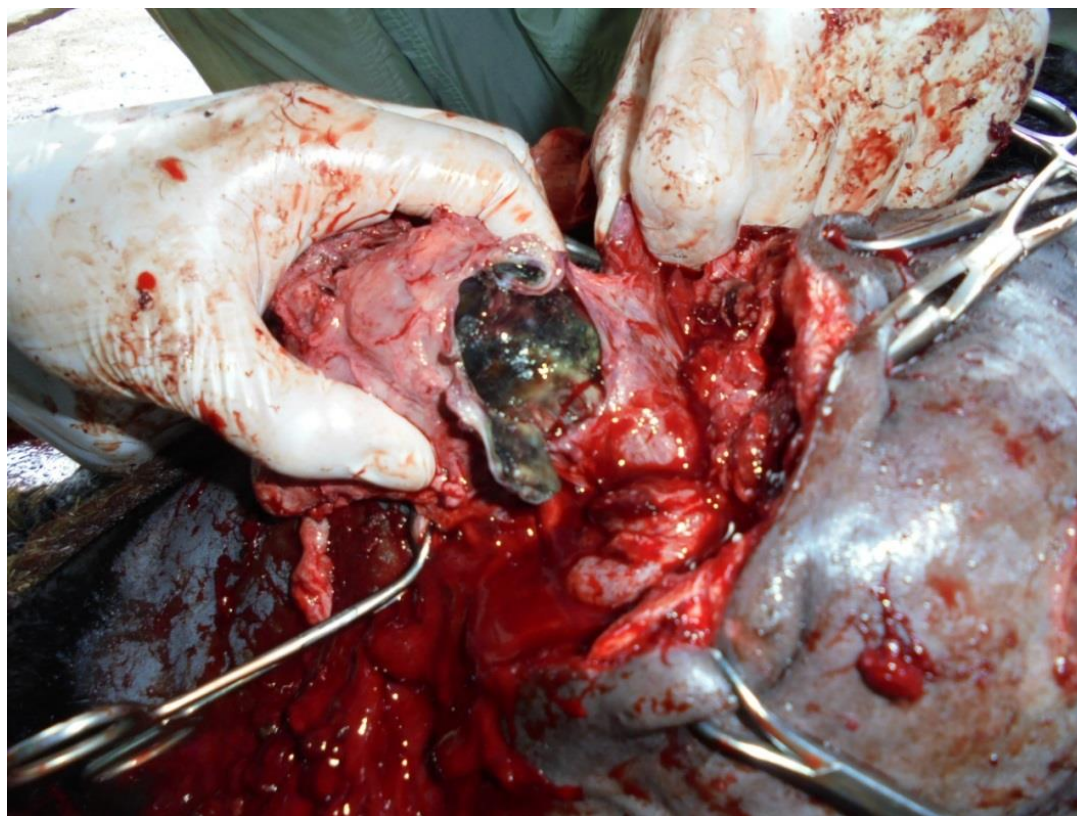
- 術前経過

抗生剤の全身投与、右眼球の洗浄を行った
が、状態の改善を認めなかった為、眼球摘出
を実施

■ キシラジンによる鎮静と眼瞼周囲の局所麻酔

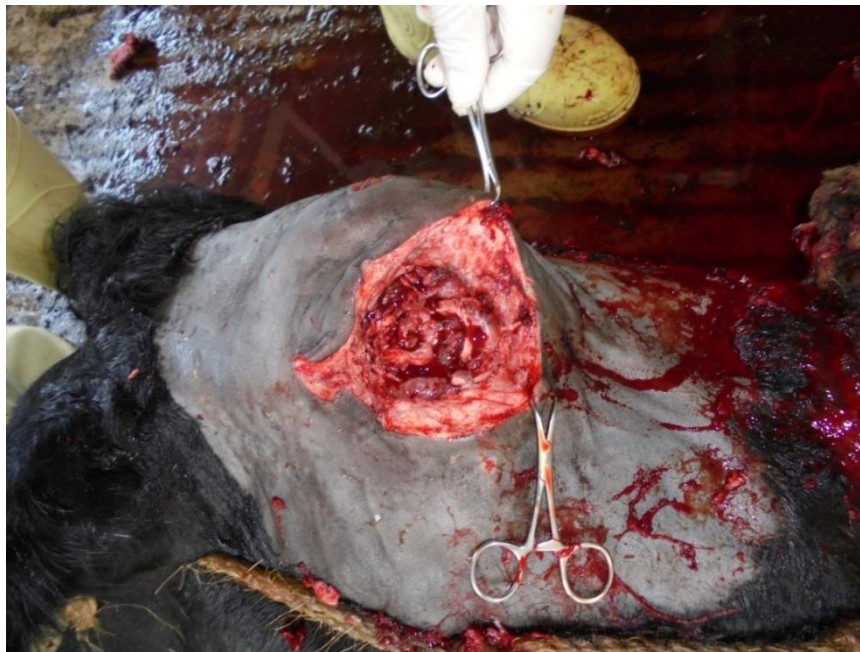


- 眼瞼を切開し、鉗子でけん引しながら皮膚と結膜の接合部から円周状に切開



- 眼窩縁に向かって結合織を剥離し、視神経と眼血管を絹糸にて結紮し、眼球を摘出

眼球摘出後



摘出した眼球



■ 術後1ヶ月



■ 摘出眼球より3菌を分離

Streptococcus uberis

Staphylococcus lentus

Fusobacterium sp.

症例②

- 交雑種 肥育牛 13ヶ月齢 雌
- 哺乳期より難治性の呼吸器感染症を罹患
- 1ヶ月齢にて右眼球白濁し、失明
- 13ヶ月齢にて発熱、右後肢及び左肩端の腫脹を伴う関節炎を発症
- カラスの咬傷により、右眼球内容物を損傷

右眼球内容物の損傷



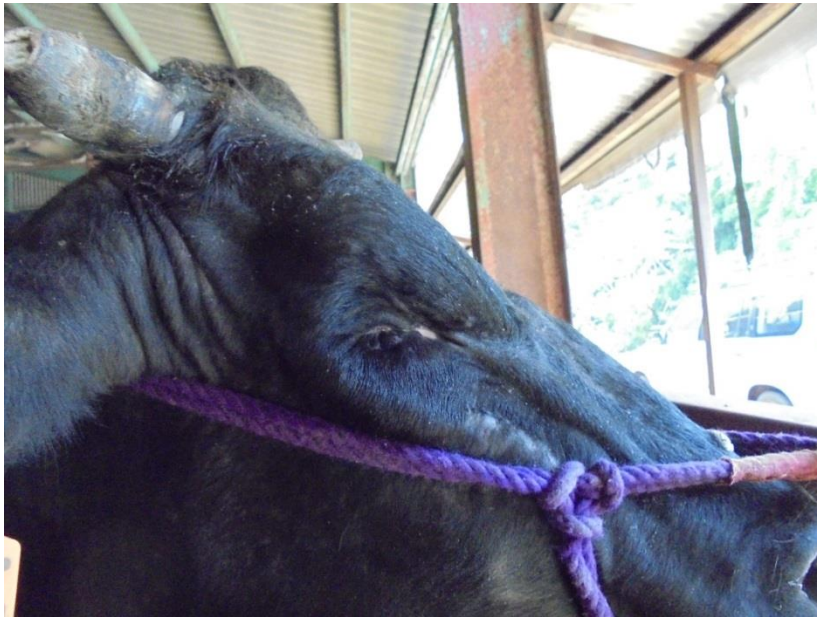
眼球内容物の大半を損傷



眼瞼を皮内埋没縫合にて閉鎖



- 術後1週間で術創の治癒
- 術後1ヶ月で関節炎の改善を認めた



考察

- 症例①摘出眼球の細菌検査より全身感染症から眼球に感染が波及したと考えられる
- 症例②若齢期の病歴、術前より認めた関節炎よりマイコプラズマなどの細菌感染が眼球に波及していたことは否定できない
- 細菌感染に伴う眼球の壊死、重度な眼球損傷に対する眼球摘出術は有効である